

令和元年6月24日現在

機関番号：23301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H03170

研究課題名(和文) 西洋初期エッチングの展開と諸相

研究課題名(英文) Early European Etching

研究代表者

保井 亜弓 (YASUI, AYUMI)

金沢美術工芸大学・美術工芸学部・教授

研究者番号：30275086

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はドイツ、ネーデルラント・オランダ、イタリア、フランスの専門家によるヨーロッパの初期エッチングについての共同研究である。エッチングの始まりが15世紀末ドイツの鉄版エッチングであることは知られているが、その後の展開は詳細には研究されていない。本研究では、それぞれの地域における初期エッチングの16世紀における発展とこの技法の当時の特徴を主に明らかにした。

研究成果は、保井亜弓「16世紀ドイツのエッチング 鉄版エッチングから銅版エッチングへ」、幸福輝「銅版画のパラゴネ エッチングの歴史記述的研究」、吉澤京子「イタリアの初期エッチング」、田中久美子「フォンテーヌブロー派のエッチング」である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、ヨーロッパ各国での初期エッチングの展開を、研究分担者それぞれの視点から詳細に分析した点にある。

初期のエッチングは当時の版画家たちを魅了したものの、その多くがわずかの作品を残すのみでこの技法から離れている。そのために初期エッチングの試みは「失敗した実験」とも呼ばれているが、実際にはさまざまな試みがあり、多様な表現が試みられていることが明らかになった。一般の版画史においては、エッチングはその発明の記述に次いで17世紀の作品を主に論じるが、その間の重要な展開を示すことができた。また、メトロポリタン美術館ゲスト・キュレーターのカサリン・ジェンキンス氏を招聘し講演を行った。

研究成果の概要(英文)：This study is collaborative research on European early etching by print scholars, specialists for German, Netherlandish, Italian, and French art. The development of European early etching remains obscure, although the invention of iron etching by Daniel Hopfer in the end of the 15th century in Augsburg is generally known. This study focuses on the development of etching in the 16th century in various countries in Europe. The results of the study are articles: Ayumi Yasui, 'German Etching in the 16th century: from iron etching to copper etching,' Akira Kofuku, 'Paragone between engraving and etching: a historiographical study on etching,' Kyoko Yoshizawa, 'Early Italian Etching,' and Kumiko Tanaka, 'Etching of Fontainebleau School: Mostly Images of Landscape.'

研究分野：西洋美術史、版画史

キーワード：エッチング ドイツ ネーデルラント・オランダ イタリア フランス

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

エッチング技法の始まりについては、19世紀半ばのハルツェンの研究(E. Harzen, *Über die Erfindung der Aetzkunst*, 1859)以来、多くの研究者の関心を集めてきた。金銀細工の技から生まれたエングレーヴィングと異なり、腐蝕によるエッチング技法は鉄製武具の装飾技法に関連していると言われ、武具生産で知られていた帝国都市アウグスブルクの武具職人ダニエル・ホプファーが1490年代半ばに最初にエッチング版画を行ったことは広く認められるところとなっている(C. Metzger, Daniel Hopfer: *Ein Augusburger Meister der Renaissance*, 2009)。エッチングの起源についてはよく論じられ、また国別にエッチングを扱った展覧会は行われているものの、ヨーロッパ全体のエッチングの広がりについての研究は少ない。2008年にプレーメン美術館で行われた初期エッチングの展示は、所蔵品ながらドイツ、ネーデルラント、イタリア、フランスにわたる貴重な展覧会であった(A. Röver-Kann, *Mit schnellen Nagel gezeichnet: Experiment Radierung im Jahrhunderts Dürers*, 2008)。初期のエッチングの試みは短く終わったため、パーシャルとランドーは「失敗した実験」と呼んだが、はたしてそれが本当に「失敗」だったのかは考察の余地がある(David Landau and Peter Parshall, *The Renaissance Print 1470-1550*, 1994)。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ドイツ、ネーデルラント・オランダ、イタリア、フランスの版画を専門とする研究者が、それぞれの視点から研究テーマを絞り、時に横断的な議論を踏まえながら、ヨーロッパ全体の黎明期及び16世紀、すなわちエッチングの最初の最盛期である17世紀以前のエッチングの特徴を明らかにすることである。

3. 研究の方法

方法の方法は主に次の二つである。

(1) 作品の調査研究

欧米の主要な美術館の版画素描室における作品調査。具体的には、大英博物館(ロンドン)、アルベルティーナおよび工芸博物館(ウィーン)、ベルリン国立美術館版画館、プレーメン美術館、国立美術館(アムステルダム)、メトロポリタン美術館(ニューヨーク)等。なお本研究では合同調査は行わず、個別に調査を行った。

(2) 文献資料調査。国内外にある1次資料および2次資料の読解及び分析。メトロポリタン美術館ゲスト・キュレーターであるキャサリン・ジェンキンス氏によるフォントナーヌブロー派のエッチング研究書3巻本(2017)は、60年ぶりの本格的なカタログであり、とりわけフランス初期エッチング調査に役立った。

4. 研究成果

本研究の研究成果は、『西洋初期エッチングの展開と諸相』(2019)に収録された各研究者の論考に示されている。

ドイツを担当した保井の「16世紀のエッチング 鉄版エッチングから銅版エッチングへ」では、ドイツを中心に初期エッチングの特徴を多方面から明らかにしている。

まず同じ凹版画技法であるエングレーヴィングとの比較によるエッチングの基本的な特徴として次の3点が挙げられる。1、線の太さは基本的に同じであり、その先端は丸みを帯びる。2、より自由な線が描け、エングレーヴィングとは異なり特別な技術の習得が必要ないため、画家ならば誰でも手掛けることができる。3 制作時間が短く早く版を仕上げるができる。次に古文獻にみられるエッチング技法について概観した後に、初期のエッチングにおけるエングレーヴィングとの線的表現の類似性をその派生という問題から指摘した。素材、技法への関心が高かったデューラーは例外的であり、パノフスキーが述べる「線描的中间色調」をエッチングでも試みていたと考えられる。ダニエル・ホプファーはオープン・パイトの面的な腐蝕と通常の線的な腐蝕を巧みに併用して、グレーの中間的色調を生み出した。しかしこの技法を後に発展することはなかった。

素描とエッチングはしばしば結び付けられて語られるものの、その習作的な性質から需要がなく、そのために最初期のエッチングにおいて版画家たちがこれから早々に離れていったという指摘がなされている。一方最も素描との関連が指摘されるアルトドルファーの風景エッチングの場合、すでにコレクターが存在していた。

鉄版エッチングから銅版エッチングへの移行がヨーロッパにおいていつどのように行われたのか、については未だに明確な結論はでない。ドイツにおいては、少なくとも30年代のニュルンベルクには伝わっていたと考えられる。なぜアブラム・ボスのエッチング技法書の翻訳がドイツ語版だけ際立って多いのか、についても、ドイツにエッチング技法書の需要があったのではないかという推論をするに留まった。

エッチングとエングレーヴィングの併用技法は、重点的に調査をおこなったものであり、エッチングにエングレーヴィングで修正などを加える補足的な方法と、明らかに意図された使分けが行われている場合があり、拡大写真でそれを示した

最後に、ドイツでは16世紀半ば以降に銅版エッチングは盛んに行われていたが、そこには

装飾的、実用的な用法がしばしばみられ、さまざまな装飾を手早く制作するのにエッチングが適していたのではないかと考察した。

ネーデルラント・オランダを担当した幸福の「銅版画のパラゴネ エッチングの歴史記述的研究」では、エッチングの価値づけの歴史をその黎明期から 19 世紀まで、多くの 1 次文献を用いながら論じている。

19 世紀に画家がこぞって手掛け、現在でももっとも親しまれている凹版画技法がエッチングであるが、最初の本格的なエッチング技法書の著者であるアブラアム・ボスが目指したのはエングレーヴィングのビュランの線をエッチングで表現することであった。黎明期の版画家たちがこの技法に魅了されながらも、早々にこれから離れていったのはエングレーヴィングに対する「劣等的等価物」をあえて行う必要がなかったからである。ボスにおいては、エッチングとエングレーヴィングはあまり区別されていなかったが、その第 3 版でコシャンにより大幅に増補改訂された書では、エッチングにはエングレーヴィングとは異なる表現があることが明示されている。

コシャンの新たな見解に影響を与えたのは、レンブラントのエッチングであると考えられる。フランスにおけるエングレーヴィング優先主義とは対照的な活動がみられたのがオランダであった。1600 年頃のオランダでは、エングレーヴィングの達人が輩出したが、ホルツィウスとハウトは対照的であり、前者が描線で彫り込むことで明暗表現をしているのに対し、後者は麵を意識した諧調表現へと向かった。その結果ハウトの版画は「黒い絵」のような絵画的表現を獲得することとなった。ハウトの《エジプト逃避》にはエッチングも使われている。

こうした流れで、カロ＝ボス派とは全く対照的なハウト＝セーヘルズ的なエッチングの流れが誕生し、ここにエッチングに新しい機能がもたらされることとなった。そのような版画のありかたを継承したのがレンブラントだった。

18 世紀のフランスでレンブラントはきわめて高い評価を得たが、それはフランスでレンブラントに影響を受けエッチングが制作されたのではなく、コレクショニズムの世界で生じた。

現代の版画研究の基礎を築いたアダム・バルチュはその『画家＝版画家』（1803 28）の序文では、エッチングの芸術性を評価する一方で、エングレーヴィングを高く評価する見解も述べている。バルチュは伝統的な版画史観を持っており、それはコレクターであるマリエットにおける素描の代用品としての版画を称賛することに影響を受けている。

最後に 18 世紀にパリとアムステルダムで活躍したベルナルド・ピカールの版画集により、この複製版画集がエッチングで制作されていることに注意を促しながら、バルチュの「画家＝版画家」とは、エッチングの優位を述べたのではなく、むしろこの二つの技法の共存関係を象徴する言葉だったのかもしれないと結ぶ。

イタリアを担当した吉澤の「イタリア初期エッチング」では、16 世紀前半から 17 世紀初頭までのイタリアのエッチングを概観し、とくに最初期のエッチングを考察するとともに、アルプス以北のエッチングからの影響としてピットーニの著作装飾を論じている。

まず、イタリアのエッチング作者の地政学的分析として、1、最初期のイタリア・エッチング（マルカントニオ・ライモンディ、パルミジャーノ）、2、1600 年以前のヴェローナ、ヴェネツィア、ヴェネト地方、3、1600 年以前のポローニャ、4、1600 年以前のローマ、5、パロッチ、およびその追隨者に分けて、解説している。

イタリアで最初にエッチングを試みたとされるマルカントニオについて、ヴィーンにおける調査に基づき、検証している。ヴァザーリによる『美術家列伝』のマルカントニオ伝において、エッチングを「称賛に値するもう一つの発明」として制作手順も記している一方で、「ビュラン彫りほどのめいりょうな線は得られない」とも述べている。マルカントニオは、エッチングを試みながらも目指していたのはエングレーヴィングのような効果であり、作品は小ぶりで大判のエングレーヴィングの持つモニュメンタリティーは見当たらない。

近年の研究によればパルミジャーノのエッチングは 16 点であるが、バルチュが認めた作品を外した点について、日本で展示された作品を実見したことに基づき考察している。

ヴェネツィア派のスキバヴォーネについては、ドライポイントの使用が認められるため、銅よりも柔らかい錫板が使われたのではないかと、という指摘がある。この作家についても東京での展覧会で作品を実見に基づき、インクの拭き残しや不規則なしみの他に、ワッシュの使用、紙の地塗りが行われることにより、同じ作品でも異なる仕上がりとなっていることを確認している。

16 世紀半ばのヴェネト地方におけるアルプス以北由来のエッチングの影響例として、ピットーニ『著名人標章集』のカルトゥーシュをとりあげ、著者はすでにそれらがフランスおよびネーデルラントで出版された 7 つの装飾版画集にあることを検証している。アントウェルペンのヒエロニムス・コックはシリーズものの装飾版画を出版したが、それは、フォンテーヌブロー宮殿におけるストゥッコ装飾にもとづいた版画にみられるイタリア起源のグロテスク文様をカルトゥーシュと呼んでシリーズものとして出版したドゥセルソーや、同じくフォンテーヌブロー派のルネ・ボワンによるシリーズ版画に影響を受けたものだった。ピットーニにみられる影響関係は、装飾デザインが装飾版画集を通じて国際的に流通・融合したダイナミズムの証左として版画史上に位置づけられる。

フランスを担当した田中の「フォンテーヌブロー派のエッチング 風景表現を中心に」では、フォンテーヌブロー派のエッチングを中心に、風景表現を中心として版画というメディアが追

及した新たな表現の可能性を論じている。

まず、フォンテーヌブロー派という言葉は、アダム・バルチュが『画家＝版画家』において初めて用いた用語であるが、その製作地はフォンテーヌブロー宮殿とパリの2か所であり、前者は1542年頃から48年には終わり、後者は1545年以前に始まり1580年まで続き、また前者ではエッチングが主であったことが特徴的である。

デューラーの《聖エウスタキウス》I ♀ のマスターおよびレオン・ダヴァンが特徴的な木が用いられている。デューラーに限らず多くのネーデルラントの風景画から、このような風景の細部の引用が行われている。

縁取り装飾/カルトューシュの中の風景では、ストウッコ装飾を版画化したもので、内部の装飾が描かれていないものがあり、フォンテーヌブロー宮殿で活躍した版画家でもっとも知られているファントウツィのものは、すべて内部を写していない。その代わりにそこに風景表現を導入したことが彼の創意である。それらの風景画もネーデルラントの風景画が源泉となっている。平明な風景は明暗の対比の強烈はカルトューシュの存在を一層引き立たせ、一方近視眼的にとらえられたグロテスクなカルトューシュの装飾は、奥に広がる清澄な風景を際立たせる。対照的な表出方法で組み合わせられた二つの要素が互いを引き立てあい、これまでにない重層的で豊饒な表現を生み出すことになった。

中央画面を欠いたカルトューシュだけの版画は装飾衣装として確立し、流布していくことになる。デュ・セルソーはフォンテーヌブロー宮殿の装飾ではなく、ファントウツィの版画に基づきながら、その風景を除いたカルトューシュを用いて版画集を刊行している。それは、またピットーニの『著名人標章集』で用いられた。このように、転用の連鎖を繰り返す中で、版画は多様なヴァリエーションとなって増殖し、多様な残照を生み出し続けた。

本研究の締めくくりとして、2019年1月26日に日仏会館にて、日仏美術学会の共催を得てメトロポリタン美術館ゲスト・キュレーターのキャサリン・ジェンキンス氏による「フォンテーヌブロー派の版画 1542年から1547年にかけて」を行い、このテーマにおける最新の研究を紹介するとともに、質疑応答では活発な意見交換がなされた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計10件)

Ayumi Yasui, Where has Paris Gone? Sebald Beham's Fountain of Youth Reconsidered, Sacred and Profane in Early Modern Art, vol.1, 2016, pp. 19-35

保井亜弓、総論 ドイツ版画の諸相—その始まりから近世まで、言語文化、33号、2016, pp. 4-27

保井亜弓、アウグスティン・ヒルシュフォーゲル作《クレオパトラの死》、金沢美術工芸大学紀要、61号、2017, pp. 73-87、doi.org/10.15103/00000028

保井亜弓、神谷佳男、ワインの澱から作る顔料の復元的研究、金沢美術工芸大学紀要、62号、2018, pp. 37 - 52、doi.org/10.15103/00000564

Ayumi Yasui, A Woodcut by Sebald Beham, Print Quarterly, referee reading, vol. 34, 2017, pp. 241-247

Ayumi Yasui, Sebald Beham's Crucifixion Woodcut Rediscovered, Print Quarterly, referee reading, vol. 35, 2018, pp. 304-305

吉澤京子、16世紀装飾版画研究の最近の動向 ヒエロニムス・コックから出された装飾、コミュニケーション文化、10号、2016, pp. 69-72

吉澤京子、イタリア初期エッチング序説、コミュニケーション文化、11号、2017, pp. 162-166

田中久美子、宮殿を飛び出した フランソワ一世のギャラリー 版画に写し取られた室内装飾、文星紀要、28号、2017, pp. 35-63

田中久美子、フォンテーヌブロー派の版画 デューラーの受容について、文星紀要、30号、pp. 39-54

〔学会発表〕(計9件)

保井亜弓、ドイツ版画の諸相—その始まりから近世まで、シンポジウム「創造・伝達・記憶の場としての版画」、2015

幸福輝、17世紀オランダ美術におけるアジア、東洋文庫、2015

幸福輝、版画家レンブラント、長崎県美術館、2015

幸福輝、銅版画のパラゴネ、明治学院大学文学部主催講演会、2017

Akira Kofuku, Rembrandt in Japan/ Rembrandt on Japan, Netherlandish Art and World, 2018

吉澤京子、クリストフ・ヴァイゲルの紋章関連書籍について、物語イメージ研究会、2016

田中久美子、ルネ・ダンジューの『馬上槍試合の書』—テキストと挿絵の関係、日仏美術学会、2015

田中久美子、フォンテーヌブローで花開いた美術、地中海学会、2016

田中久美子、フォンテーヌブロー宮の美術—フランソワ 1 世の翼棟を中心に、物語イメージ研究会、2016

〔図書〕(計 6 件)

保井亜弓他、金沢芸術学研究会、幻の顔料フランクフルト・ブラックの復元的研究、36
保井亜弓他、金沢芸術学研究会、西洋初期エッチングの展開と諸相、90
幸福輝他、山川出版、歴史と地理、2015、65
幸福輝他、中央公論美術出版、17 世紀オランダ美術と アジア、2018、466
田中久美子他、ありな書房、フランス近世美術叢書 V、2017、294
田中久美子、ありな書房、フォンテーヌブローの饗宴—イタリア・マニエリスムから美術の官能世界へ、2017、298

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：幸福輝

ローマ字氏名：KOFUKU, AKIRA

所属研究機関名：独立行政法人国立美術館国立西洋美術館

部局名：学芸課

職名：客員研究員

研究者番号(8桁)：00150045

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：吉澤京子、田中久美子

ローマ字氏名：YOSHIZAWA, KYOKO, TANAKA, KUMIKO

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。